



# 国際シンポジウム 東南アジアにおけるゴングの映像民族誌

ふくおか しょうた  
福岡 正太  
民博 文化資源研究センター

対象を記録し分析するばかりでなく、人と情報を結びつける映像。  
映像を介した意見と情報の交換は、対象への理解をうながし、あらたな発見を見出す機会をもあたえてくれるだろう。  
今回のシンポジウムでは、東南アジアのゴング文化を論じるとともに、映像記録の可能性について意見をかわした。

## ゴング文化をとらえる視点

東南アジアのゴング音楽については、これまでさまざまな調査研究がおこなわれてきた。民博においても、二〇一〇年三月に新しくなった音楽展示において、東南アジアのゴングをテーマとしたセクションをもうけた。ここでは、フィリピンの平ゴングのアンサンブル、カンボジアのこぶつきゴングと平ゴングのアンサンブル、フィリピンのクリンタン（写真参照）、カンボジアの大規模なアンサンブル、ピン・ピアット、そしてインドネシアの大規模アンサンブル、ガムランを展示している。この展示の準備のために各地において映像記録の作成をおこない、それらの映像の一部も展示場で公開している。わたしたちはこれらを踏まえて、さらに東南アジアのゴング文化への理解を深めるための映像の制作を目指している。今回のシンポジウムは、東南アジア音楽研究の専門家を集めて、今後のゴング文化の映像記録への視点を探ることを目的として開催した。あらたに作成しようとしている映像記録は、個々の地域のゴング文化の記録の空白を埋めながら、相互の関連を探り、さらに現代におけるゴング文化の展開を探るものとするものである。

## ゴング研究の広がり

かつてゴング音楽の研究は、インドネシアの背景には、ゴングを流通させる楽器商の出現がある。彼らは、ジャワ島の大規模な楽器工房から、より安価で質の良いゴングを買い取り、バリ島各地に流通させている。

他方、ゴング音楽は、東南アジア以外の地域へも広がりがつある。民博の寺田吉孝氏はそうした例のひとつとして、フィリピン系アメリカ人のあいだでのクリンタン音楽の広がりを報告した。クリンタンは、フィリピンからの移民社会において共通の文化遺産としてみなされつつある。北米におけるこうした独自の展開は、おそらくフィリピンにおけるクリンタンにも逆に影響を与えるようになるだろう。

東南アジア地域内においても、多様なゴング文化に対する意識が高まりつつある。インドネシア芸術教育財団のエンド・スアンダ氏は、ゴングを題材のひとつとして取り上げた、芸術における多文化教育カリキュラムについて報告した。東南アジアは、多くの民族からなる社会であるが、芸術教育プログラムは、必ずしもそれを適切に反映していない。報告されたカリキュラムは、多文化を前提として、自らの文化伝統を再発見することを手伝う実践的教育プログラムとして興味深いものだった。



クリンタン（タラカ、フィリピン、2008年 撮影・寺田吉孝）

アのガムランやタイのピーパートなど、おもに王権と結びついて発達してきた大規模なアンサンブルに集中する傾向があった。それに対して各地の少数民族のゴング・アンサンブルなども徐々に調査研究が進みつつある。シンポジウムでは、長年ベトナム音楽を研究してきたフォン・グエン氏により、ベトナム中部高原の少数民族にみられるさまざまなゴング合奏が、写真や録音、映像をもちいて紹介された。また柳沢英輔氏（青山学院大学）は同じくベトナム中部高原のジャライイとよばれる人びとの儀礼におけるゴング演奏とゴング調律師の技を取り上げ、自身が制作した映像作品の上映もおこなった。

近年発展しつつある音楽考古学の分野で、研究をつづけるアルセニオ・ニコラス氏は、現代のゴング文化を映像でとらえる

梅田英春氏（沖縄県立芸術大学）は、これらの議論を踏まえ、伝統的な文脈を超えたところで、ゴング文化の現在を映像で記録することの重要性を論じた。伝統的なゴング演奏のみを撮影しても、現代のゴング文化のダイナミクスは記録できない。

このシンポジウムで提示された多様な視点を反映し、東南アジアのゴング文化の動態を記録する映像を制作することは容易ではない。一本の映像作品の提示だけで、それを表現することはできないだろう。多様な映像素材から東南アジアのゴング文化のダイナミクスが浮かび上がってくるような映像提供の方法を模索していく必要がある。わたしたちはこれまでの研究で、多くの人が、ひとつの映像から、いかに異なるものを引き出すかを経験した。映像を触媒とした意見と情報の交換は、意外な発見の場となる。わたしたちは映像を触媒として、多くの人びとがゴングについての意見や情報を交換する場をつくり、そこでえた知見を蓄積していく試みも同時に進めていきたいと考えている。

このシンポジウムは、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究における「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班の研究活動の一環として、二〇一一年三月十四日と十五日二日間、国立民族学博物館第四セミナー室にて開催した。



王宮に伝わるゴングを磨く（チルボン、インドネシア、2009年ムハンマド生誕祭にて）

難破船から発見されたゴングなどから、一〇世紀から一七世紀にかけて交易品として流通したゴングの変遷について論じた。こうした視点から見ると、東南アジアの各地のゴング文化は、常に地域間の交渉のなかで発展してきたことがわかる。

## ゴング文化の現在

一方、ゴング文化は、現代においてもなおダイナミクスに変化している。たとえば、ゴング製造について、ゴング工房が失われていく危惧が示される一方で、集約化と大規模化もみられる。バリのゴング職人の家系をひく研究者イ・マデ・カルタワン氏によれば、バリ島では、ガムランの楽器すべてを製造できる工房は減る一方で、地